

## 「集合住宅フォーラムWGのあり方」と「日本の住宅政策」について 議事要旨

日時：2001年10月23日（火）18:00～21:00

場所：日本建築学会 305 会議室

出席者：服部岑生、園田真理子、加藤実、山本理、鈴木雅之

記録：鈴木雅之

### 1. 服部先生からのメッセージ

服部先生からは、都市公団に関わる話題と、今後の集合住宅フォーラムWGが取り組むテーマを考えるにあたっての話を伺いましたが、その内容をそのまま集合住宅フォーラムWGに対する今後のあり方へのメッセージとして受け止め、とりまとめました。

#### (1) 行動として

##### < 業界として >

計画化できる不動産や建築ビジネスがなくなってしまうことに危機感をもちなければならない。職業運動として考えていく必要があることに気付くべき。

設計事務所はどう生き残るのか。それは各自で考えなければならない。

技術者は転身していかなければならないが、どのように転身していくかが問題。10数年前に改革を行ったイギリスでは、10数年間、技術者に苦しみがあった。

ものづくりのシステム自体を変えていかなければならない。

建築学会や集合住宅研究会はどう考えているのか伝わって来ない。静観しているだけなのか。

##### < 集合住宅フォーラムWGとして >

縮こまってはいけぬ。こういう時には勢いが大切。

独自の声明を新聞に出してしまうような行動が大切。自分たちの思っていることを素直にいうべき。黙っていても伝わらない。

自分たちの損得から物事を考えることを始めるべき。自分たちで守る気持ちが重要で、待っていても、よい結果はやって来ない。

仕事をつくりだしていく集団になっていく必要がある。

学者もがんばる必要がある。

なんとなく徒党を組んで政治的な活動をするのではなく、確信と見識をもって政治的に行動すべき。発言の訓練を受けた人とそうでない人がいる。こういう場で訓練されてもよい。

都市住宅学会は空間計画の言語がないのが弱点であるが、都市住宅学会のような説明力は大切。

#### (2) 内容として

現在は、建築界のシステム全体がコントロールされていない。公団は環境を担保する仕組みをもっていた。これは民間の論理とは違う。建築確認制度も民間寄りになってきているが、環境が担保されていないという問題があるとも聞いている。

なりゆきとしての住宅像しかなくて、あるべき住宅像や環境像がよく見えていない。

アプローチの方法を多様化すべき。住宅を研究する学者にはインテリア系が多い。都市環境、政策、不動産、生産に欠けている。これらを含めた提案型の人であるのが巽先生。ストックの視点から見ると住宅に公共性があることを見出した。

空間論的な提案を具体的に打ち出せれば、それを事業化することに動いてくれる人は現実に何人かいるだろう。

## 2 . 住宅政策についての討議

欧米では民間を分割型にしており、不動産が無数にある。そこには、ローカリティがある。特に英・仏・米。ほとんどがアマチュアリズムであるから大丈夫なのかも知れないが。

基盤整備の主体は必ず必要。

日本では、直近で起きたことに、対処療法的にしか対応していない。

数字的な目標ではなく、計画技術的な側面が必要。